

第一の天地創造物語(創 1:1～2:4)においては、人間は、神さまによって被造物の管理者として創造されました。

今日の第二の天地創造物語では人間の本質は土の塵だ、と語っています。紀元前 1000 年頃、ダビデ・ソロモンの時代、イスラエルが最も繁栄し、豊かになった時代に成立したと考えられています。どんなに繁栄を謳歌し、豊かさを満喫していても、人間は土の塵から造られたものに過ぎず、命も今の繁栄も神さまが与え、保って下さっているからなのだ、と語っているのです。

著者は、この物語を神さまによって創られた人間が神さまと他の被造物とどのような関わりを持って生きているか、ということに焦点を当てて描いています。18 節の「人が独りでいるのは良くない」とは、人間を他者との出会いと交わりに生きるべき者だ、ということです。神さまはそのような人間に共に生きる相手を造られます。「彼に合う」と訳された語は元々「向かい合う」という意味です。「助ける者」も、どちらかが主体で他方は補助者ということではなく、対等に向かい合って、互いに助け合って生きる相手です。最近の英語訳聖書には「助ける者」をパートナーと訳しているものがあります。神さまが先ず造ったのは、野の獣、空の鳥でした。しかし、人間にとって、パートナーは動物たちの中には見出せないと記すのです。

深い眠りの中で、神さまはアダムのあばら骨の一部を取って、それで女性を造られたと語るのです。このことは女性は男性のあばら骨に過ぎない、と女性の価値を低く見ているのではありません。野の獣や空の鳥が造られた時、それらは土で形作られました。しかし女性の素材は人の体の一部です。人と女性は同質な存在なのです。勿論、根本的には人間は土の塵から造られたのですから、動物たちとの共通性も存在します。そして、神さまは女性を人のところに連れて来られました。「ついにこれこそ」と、探し求めていたパートナーがついに見つかった、という喜びと感動が言い表されています。「わたしの骨の骨、わたしの肉の肉」という言葉には、この相手が自分と同質の存在、人格的な存在だ、という意味が込められています。

注意深く読んでみますと、アダム、つまり人、の創造は語られていますが、アダムが男であるということは 23 節までは出て来ないのです。男と女という言葉は、23 節に初めて出てくるものです。アダムは、神さまが造り、連れて来て下さった女性との出会いにおいて初めて、自分が男性であることを知った、と言えるのです。人間は自分と同じ人間でありつつ自分とは全く違う他者との出会いと交わりに生きる者とされているのです。そこには神さまの祝福がある。そのことをこの第二の物語は語っているのです。